宮澤弘幸が北大時代、親交を深めたフォスコ・マライーニの長女、ダーチャ・マライーニ（87 歳）が、6 月 11 日から 20 日、「ダーチャ・マライーニを日本に招く会」の招待で来日しました。12 日、宮澤弘幸が眠る東京新宿・常圓寺の供養塔にお参りの後、歓迎・交流会で講演しました。あの戦争当時、敵国人として強制収容された経験を踏まえて、世界は今、再び危険な状況にあることに警鐘を鳴らしました。当日配布した「ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会」のプログラム・参考資料全文は別項で紹介します。

ダーチャ・マライーニさん歓迎・交流会

2124 年 6 月 12 日　東京新宿・常圓寺

6 月 12 日正午、新宿・常圓寺に着いたダーチャさんは、宮澤弘幸が眠る供養塔にお参りした

◇ダーチャ・マライーニさん講演要旨

私にとって日本は、子供の時期、８年間を過ごした大切なところです。私の中で非常に重要なところであり、そして、それはその後の私の未来を創る礎の一つでもありました。私にとって日本とは私のアイデンティティの一部です。アイデンティティ、人のアイデンティティとは一個の石、一つの岩ではありません。それは何層にもいくつにも与えたものが重なって、できているものです。私のルーツの大事な一つが日本にあると思っています。

◆質問①　日本では未翻訳ですが、「Vita Mia」を書き終えられて、最も訴えたかったこと、今回の日本訪問で、最も確認し再認識されたいことは。

私のそれに対する回答はいつも「私はその時は大変な経験をしたけれども幸運だった」ということです。私は常に日本人と共にいた。日本人と確かにいるという状況で過ごしていた。その時に子供心にも感じたのは、私たちは敵となる存在は、官憲だったんだけれども、官憲は収容所の中の人です。そして、外にも日本人がいて、その人たちは皆、私たちの側にいてくれたということを知っていました。

私が外にいた人たちが皆、私たちの側であったとわかったのは、これは大人になって考えてみてわかってきたことです。一つ理解したことが、こういうことはいつも繰り返され続けているということです。人とは絶対の力を手中にすると、自分でも知らないうちに非常に残酷になるサディスティックになってしまうものなのです。我々はその時、収容所では官憲の手中にありました。官憲は古い軍隊主義の思想の人々でしたから、私たちを祖国の裏切り者として扱い、そういう祖国の裏切り者は、どんな残酷な行為で扱っていても正しいのだという考えでした。しかし、これは収容所の外ではなかったことなんです。

日本人の多くは私たちの友達でした。例えば、その私たちが収容される前のウバです。私は「お母ちゃん、小さいママ」と呼んでいたんですけれども、彼女が私たちを訪ねてくれました。

そして、その時、風呂敷いっぱいに食べ物を持ってきてくれたんです。でも、これは官憲達によって持っていかれてしまいました。そして、その上、彼女は拷問を受けました。スパイではないかと。そのことは絶

対なかったのですが、言ってみればこの体制とは、実際の市民とは違うところにあるものだなと私は理解しています。だからこそ、私は今でも日本人と良い環境を持ち続けていられるのです。

◆質問②　ダーチャさんの文学は、ダーチャさんの何の体験、思いから書かれてのでしょうか？

私たちが収容所に送られる前に、もし私たちがサロ共和国への従属に同意のサインをしなければ、収容所に送られるだろうと言われていました。サロ共和国というのは、イタリアの北部で当時建国されたナチやファシズムとの同盟を組む国家です。そこに従属するということは、政治的な選択でもありました。しかし、父と母は政治的な選択ではなく、このサロ共和国への従属を拒否したのは、人種差別、人種主義への反対というイデオロギーのためでした。

この人種差別、人種主義というものは、両親には耐えられないことでした。ですので、父も母もその署名を求められた時、父と母はそれぞれ別々に、その署名を求められたのですけれども、それぞれ別々にノーと言いました。

その当時、周りの人々は母だけは少なくても、少なくとも母だけは 3 人の小さな娘がいるから、サインするだろうと考えていましたが、母も拒否しました。両親とも民主主義という、イデオロギー理想に対して非常に忠実でありました。結局は私たち娘も、例えば、私は当時６歳であり、妹は２歳と小さかったのですけれども国家の裏切り者として、ひどい扱いを受けることになったのです。これが戦争の悲惨さです。

◆質問③　文化の持つ重要性についてお話しいただけないでしょうか？

まず１つの仮定として、人間というのは、自分たちの内側に善も悪も両方備えている。フロイトも同じことを言っていますね。エロスとタナトスというと思いますが。エロスというのは命に対して人生に対して、美しさ、芸術喜び、そうしたものを讃えるものですね。タナトスというのはある意味で死ぬに向かう者、破壊すること自分自身、そして、他人をも破壊するという、この両方を私は持っています。すべての人がこの二つの能力を備えています。

そして、そのネガティブな方をコントロールできるのは、教育であり、文化であり宗教であり、思考であり勉強であり、読書であり哲学である。こうしたいろいろなことをすべて、まあ文化と一括りできますが、これらが私たちの持つタナトス、ネガティブな側面、こちらをコントロールすることができる。そうすることで、我々が持っているネガティブな部分を変えてゆく、それはより高いものに変える、崇高なものに変える。そういった破壊の力を建設する力にしていくことはできると思うんです。けれども、いつもそれができるわけではやはりないです。けれども、それをする価値が本当にあるものだと思っています。

私の両親の選択はもちろんそれによって私たちは命を危険にさらしましたし、そして、我々その選択によって、たくさんの苦しみを味わいましたが、彼らのこの選択は本当に模範と言えますし、私の人生に大きな多大な影響、決定的なものでした。

◆質問④　宮澤弘幸さんの記憶が残っていたらお聞かせください。彼との出会いやダーチャさん自体が楽しい幼児期を送った住まい跡にモニュメントを作りたいのですが、いかがでしょうか？

宮澤弘幸さんのことですね。その当時、私は当然とても小さな少女でした。そして、宮澤君はいつも一緒に来てくれて、いつもあの近くにいる存在でした。そして、私の目には彼は本当にこう忍耐強かった。子供と一緒にいて、私や妹はとにかく木に登ったり、騒いだりしていましたけれども、いつも微笑んでいました。子供に対してのその彼の愛情、そして、また、同時に母に対しての彼が持っていた愛情ですとか、私の父に対してのリスペクト、尊敬しているというのもすごく感じました。

父とは特にスポーツを通しても、本当に良いあの友達でした。一緒に自転車で旅行したり、スキーに行ったり、高い山に登ったり、このようなことをしていました。このような友情が本当に含まれていましたので、家族の一人としても認識していました。彼は逮捕されたということを知ったのは、私たちはもう京都にいたんですけれども、この逮捕されて刑務所に入れられたということを聞いて、私たちは本当にな

んでと自分の家族のように感じていたのに、この理解不能な嫌疑をかけられて、この容疑は全くありえないというふうに思いましたし、とにかく、とても辛い思いを私は抱きました。

◆質問⑤　日本でも世界でも軍事強化の動きがあるが、それをどう思いますか？

今は危険な難しい状況であると私は思っています。例えば、ガザといったところの紛争はもう別として、世界全体が今、非常にこのような危険な状態にあります。それは分離という問題です。特に文化の相克、文化の中の、文化の分離相克というものがあるように思います。それがひいては軍事紛争となると思っています。

文化の相克、衝突とは、民主主義の考え方を隔てるものです。民主主義は、国家というものは様々な主権、政府があり、警察があり、検察があり、医療制度があり、学校がある。このような主権それぞれが分離してそして存在し共存しています。これが民主主義なのですが、また、別の部分では民主主義は無意味だと考える人もいます。世の中は、国は、強権主義の方がうまくいくと考える人です。すなわちひとりの強い力を持つ人が上から下へのヒエラルキーの伝達によって統治していく方がうまくいくという考え方です。今の世の中では、この二つの立場は非常に激しく衝突を強めているような感があります。問題は確かに今起こっている問題は、地政学的、経済的な観点から分析されがち、捉えられがちですが、その根本には文化の違い、文化の衝突があるということがあると私は思っています。

当然、これはこのような文化の相克というものは、多くの人々に影響を与えます。例えば、社会生活や、あるいは、家庭での家庭生活というもの、日々の行動を振る舞いというものに影響を及ぼします。特に現在の技術革新、テクノロジーの変化というものが私たちの生活を社会を大きく変えました。例えば、家庭もそうですし、家庭のみならず、例えば人間の感情性格、あるいは、肉体的な関係までも変えています。上下関係、ヒエラルキーや経済、あるいは、労使関係にも影響を及ぼしています。それが大きな一つの変化であり問題です。

もう一つは、移民・難民の問題です。日本ではこれは、あまり強く、あまり強く感じられていないと思いますが、今これは世界的には大きな問題です。飢えや乾燥、あるいは、独裁者から逃れるためにアフリカや、中東から多くの人々が欧州へと流れ込んできています。今、このような人たちをどこに住まわせるべきか、どのように扱うべきかというものが大きな課題です。

このように世界は大きく変わりつつあります。では、このような変化を前にして二つの大きなその取り組みというか、態度があると言えましょう。それは右と左というものです。右と言われる考え、立場、態度というものは、変化を受け入れない、変化を止めようとする立場、考え方です。私はこれについては何ら善悪に関しては発言、意見は申し上げません。

そして、もう一方の左は、変化はまず検証し、それを受け入れることを考えていこうという立場です。このように２つの違う態度というものが社会の中にはあります。ではこの中でも様々な変化がありますが、また、気候変動も大きな変化の一つと言えるでしょう。例えば、気候変動に対して私たちはノーと言うんでしょうか。

あるいは、どのようにそれをそこに取り組んでいくのでしょうか？国境は固く閉じて、小さな国にして、そして対応するのでしょうか？あるいは、共に国境を広げて国と国の橋をかけつつ、取り組んでいくんでしょうか？これは確かに、このような国と国での共同というものは簡単なものではありません。しかし、私はこれが大事だと思っています。

今、地域的な紛争戦争は別として、今大きな問題にどのように取り組んでいくかということを今私たちが真摯に考えていく必要があると考えています。

もう一つ、私がぜひ付け加えたい問題というものがあります。それはこの変化への対応ということですけれども、伝統主義者の女性の社会進出に対しての反対的な態度です。特に女性がこれまでの男性の領域だとされてきた専門職への進出ということに、今大きな抵抗力というものがあります。これは特に政治的な、あるいは、旧体制の人々の中に政治家やあるいは旧体制の国の中に、このような頑なな態度が見られますが、このような不寛容というものは、非常に耐え難いものです。

◆質問⑥　「戦時中の日本」に対し、今考えて最も印象的であることは、なにでしょうか？

その時のことで、一番私の中でも心に残っているのが、人々の中に２種の人々がいたということです。一方では軍隊主義の人々、そして、一方では農民の非常に愛情に溢れた人々がいたということです。例えば、私はその当時、名古屋、そして、廣済寺に収容されていましたら、時には外に抜け出て蚕作業を農民たちの蚕作業を手伝ったことがありました。終わると農民の人たちが大根やお芋というものをくれました。とても親切でした。私はそれを持って帰っていたのですけれども、本当ならばこの農民たちは、私を突き出すことも訴えることもできたはずです。しかし、農民の人たちは、皆、非常に親切でした。私は戦争というものは、決して人々全てを変えてしまうものではないというふうに感じるようになりました。

もう一方の一つの例として、これは私にとっては非常に大事な大きな経験です。収容所に粕谷という軍隊関係の人がいたわけですけれども、彼は非常にサディスティックな人でした。例えば、彼らは食事をバルコニーでしていて、魚の頭や骨、あるいは、腐ったみかんというものを、バルコニーの下に放り投げました。そうすると、私たち子供たちは飢えていましたから、それさえにも飛びついていったんです。これは非常にサディスティックな行為でした。

人々は、一方、では非常に愛情に溢れた人々もいる。そして、もう、一方では官憲たちのように軍隊主義で非常にサディスティックな人々もいるということは、私は経験しました。先ほども申し上げたように、人は絶対的な力を持つとサディスティックになります。それはもう単にこの軍隊だけに起こることではなく、人は誰でも誰かに対して絶対的な力を持つとサディスティックに残酷になってしまうということが私がそこで経験したことです。

もう一つの別の例を出したいと思います。例えば、私たちはその当時、非常にもう体が衰弱していました。歩くことも難しかったですし、歩くのも大変でしたし、髪の毛が落ちて、そして、歯茎から血が出ていました。そして、収容所にはベンチがあったんですけれども、私たちに対しては壁にもたれて座ることが禁じられていました。もし壁に持たれているのも見つかったら、もう杖のようなもので、棒で打たれていました。ですので、私たちはそのベンチに座るさえも互いに持たせ合いながら、背中を持たされて座っていました。

もう一つの残酷な例ですけれども、イタリアから母への手紙が父に対して送られてきたのですけれども、当時もう母は非常に衰弱しました。母への手紙というものが届いてきた時に、官憲は「手紙が届いたよ。１週間待ちなさい」と言いました。私たちはその１週間心待ちにしていましたが、１週間後、ではと言って取りに行くと、官憲は目の前で手紙をピリピリと破いてしまったんです。これには私たちも、もう非常に痛烈な心の穴を感じました。しかし、彼らに対してはこのように人の心を傷つけるということに喜びを感じていたのです。

収容所というのは、収容された人々に対して、最悪の一番最も悲惨な心理状況を生み出すようになります。ですので、強制収容所をなくすことは、非常に重要なことです。このような変化と思うのが非常に大事なのです。こう、なぜならば、収容所というものはこの絶対の力というものを生み出す巣窟であるからです。

もう一つそのエピソードを付け加えます。この官憲に対しては、私たちいかなるどんな抗議を試みもうまくいかなかったんですけど、唯一うまくいった抗議があります。それは父の取った侍（サムライ）的な行為で、指切りです。私たち小さな娘たちは、栄養が足りなくて、もう死にそうになっていました。それに憤激した父が斧を持ってきて、この粕谷という官憲の前で小指を切って、彼に投げつけたんです。もう血まみれの状況でした。しかしながら、これはうまくいったんです。日本の文化を知っている人類学者だった父の知恵というものがここで機能しました。この指切りの１週間後、この官憲たちがヤギを一匹。私どものとこに連れてきました。ヤギがミルクを出しました。一日、20g のミルクでしたけれども、非常に栄養のあるタンパク質を含むものでしたので、私たち娘たちの命を救ってくれました。

その後のある朝、官憲たちが消えてしまった。私たちは何もわからず、そこにまあ取り残されたわけですけれども、そこで、周囲の農民に聞きに行ったんで

す。そしたら、戦争が終わったと私たちに言いました。もうカンガルーのようにもう飛び上がって喜びました。

その後、農民たちが私たちのところにやってきました。私たちは、なんで彼らがやってきたんだろうと、最初はちょっと恐怖を覚えたんですけれども、彼らは、天皇陛下が終戦と言ったことは分かったが、古めかしい古典の日本語で話したので、農民たちは理解できないというんですね。そこで、日本の文化を知っているイタリア人の文化人たちが、玉音放送の意味を農民たちに翻訳して教えたわけです。そして、みんなでも抱き合って喜んだわけなんです。これは素晴らしいことだったと私は思っています。すなわち、日本の文化や古典を知るイタリア人がこのようにして、日本の人たちと、まあ交流し抱き合ったという一つの事実なんですから。

◆質問⑦　近くの広沢寺のオランダ人抑留者と交流はありましたか？

私たちは何も知りませんでした。他に収容所はあるということも分かりませんでしたし、あと、それほど遠くないところに外交官の人たちが収容されていたところがあったそうなんですけれども、それも後でそういったことですね。私たちは本当に完全に閉じ込められた状態で何のニュースの知らせも得ることができませんでした。

例えば、戦況がどうなっているか、負けているのか、勝っているのか、終わりに近づいているのか、そういったことも、全く知りませんでした。そして、よくこの特高の看守たちが、「戦争で我々が勝ったら、きさまらの喉を掻き切ってやる」。そのようなことをいつも言われて脅されていたんですね。このようなことを続けて言われる言葉の恐怖心というものを皆さんの想像できないかもしれません。とにかく何もわからない。そのような、中で収容所の生活の体験の中で、唯一素晴らしかったといえるのは、本当に絶望的な空腹の中にいました。そんな中でも、父と母は私たちの学校になってくれたことです。本も何ももちろんありませんでしたけれども、イタリア語や歴史・地理・哲学。そういったことを中庭の収容所の中庭にあった桜の木の下で父や母が教えてくれました。ええ、その体験は、絶望的な飢えの中で体験したすばらしい思い出です。飢えというもの皆さん、本当に想像できないと思うんですけれども、体をむしばみます。寄生虫やシラミ、ノミ、そういったものを体の外側からも内側からも私たちをむしばむ。そういった状況です。

◆司会　父フォスコさんが研究したアイヌ民族について差別やヘイトが今まだ根強く残っています。どうあらがうべきですか。

イタリアといえば、私は一歳半で離れた国でしたので、自分にとってはエキゾチックな存在でしたね。そのイタリアについていろいろ父母が教えてくれたわけですけれども、例えば、今イタリアにいる人にとっては日本というのはエキゾチックな国、場所ですね。子供の時にこのようにして私がある意味習ったのは、世界への見方、視点というのは、自分がどこにいるかによって、本当に違うんだということ。そして、いろいろな文化との関係を結ぶことがどれだけ大切か。相手の立場に立つことの大切さも父母から教わったと思います。

◆司会　最後に宮澤さんへ１言。

宮澤弘幸君は本当に理不尽な不当な理由で拷問を受け、逮捕され、収容されて、最後には病で亡くなりました。これは彼は本当に犠牲者ですけれども、世界中でやはり起こっていることです。こうしたことが起こるのは、人に対しての尊厳、尊敬するリスペクト、これがサスペクト、つまり疑う、猜疑心を起こす、こうしたものに変わること。言葉が似ているんですよ。リスペクトとサスペクトですね。

つまり、相手を敬う気持ちが疑いに変わる時、とって変わられる時、これが戦争の一歩手前は必ずこのような空気が起こります。そして、これを本当に避けるべきですね。多くの人たちがこの疑いによって犠牲に至る。これは悪魔的なものです。これを何としてでも避けるべきだというふうに強く訴えたいと思います。